

〈研究ノート〉

絵本をめぐる多面的論考

— 絵本プロジェクトから得られた視座 —

杉原麻美

要約

日本の出版市場で2010年代後半に大きな伸びを見せたのが、絵本の市場である。絵本市場はロングセラー作品の安定的な増刷に支えられた市場であるが、近年は新刊点数も増加し、作家や作品の多様性も高まり質的变化を伴って活性化している。一方、絵本の原画を美術の対象として展示する絵本原画展は、美術館の有力なコンテンツとして発展し、この動きを牽引してきた「ボローニャ国際絵本原画展」の幹事館である板橋区立美術館が担ってきた役割は大きい。本稿では、2017年度から3年に渡って進めてきた絵本に関する研究を総括し、とくに2019年6月にリニューアルオープンした板橋区立美術館での同原画展の視察をはじめ、2019年度に取り組んだ絵本プロジェクトで得られた知見をもとに、多面的な論考をまとめた。絵本のもつ多面性によって、他の表現領域へ応用できる視座や、コンテンツ産業、美術館、図書館、行政などのステークホルダーから俯瞰した視座を得ることができた。

キーワード

絵本 出版 原画展 美術館 コンテンツ産業

1. 研究の背景と目的

1.1 日本における絵本市場

日本の出版市場において、2010年代後半に大きな伸びを見せたのが「絵本」市場である。推定販売金額の推移を見ると、2015年以降の伸びがとくに大きい(図1)。2018年の書店店頭でのPOSデータにおける児童書のジャンル別シェアにおいても、絵本は34%で児童書を牽引するジャンルである(図2)。

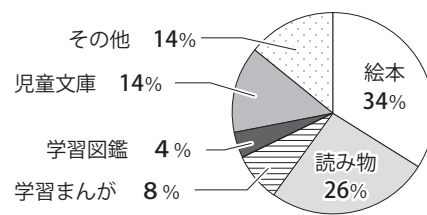
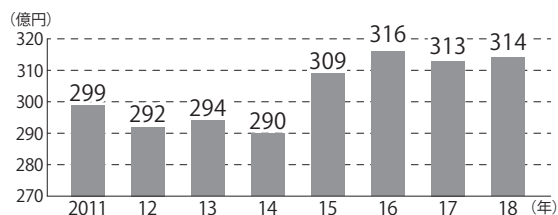


図1. 絵本市場の推定販売金額推移¹⁾

図2. 2018年の児童書の販売シェア(冊数ベース)¹⁾

すぎはら まみ: 淑徳大学 人文学部 准教授

絵本市場はもともとロングセラー作品に支えられる手堅い市場と言われてきた。ミリオンセラーに並ぶ作品の多くが1960年代から1980年代にかけて発表された作品である(表1)。このように毎年安定的な増刷がかかる絵本が存在する一方、近年は新刊点数も増加している。2018年の絵本の新刊点数は1968点(前年から11%増)で、過去10年でもっとも多い点数となっている。¹⁾絵本の市場が堅調に推移している要因について、KDDI総合研究所の畑中氏(2020)は、教育政策の側面と作品の多様化の側面から論じている。後者については、絵本のテーマの広がり(働く母親の姿や養子縁組などライフ

表1. ミリオンセラー絵本ランキング²⁾

順位	タイトル	著者	出版社	初版年	累計部数	5年間で10位以上ランキング上昇
1	いない いない ばあ	松谷みよ子/文 瀬川健康/絵	童心社	1967	682万	
2	ぐりとぐら	なかがわりえこ/作 おおむらゆりこ/絵	福音館書店	1963	523万	
3	はらぺこあおむし	エリック・カール/作 もりひさし/訳	偕成社	1976	420万	
4	しろくまちゃんの ほっとけーき	わかやまけん/作	こぐま社	1972	319万	↑
5	てぶくろ	ウクライナ民話 エウゲーニー・M・ラチョフ /絵、うちだりさこ/訳	福音館書店	1965	318万	
6	おおきなかぶ	ロシアの昔話、A. トルストイ/再話、内田莉莎子/訳、佐藤忠良/画	福音館書店	1962	312万	
7	ねないこ だれだ	せなけいこ/作・絵	福音館書店	1969	311万	
8	ぐりとぐらのおきやくさま	なかがわりえこ/作 やまわきゆりこ/絵	福音館書店	1966	301万	
9	きんぎょが にげた	五味太郎/作	福音館書店	1977	284万	↑
10	じゃあじゃあ びりびり	まついのりこ/作・絵	偕成社	1983	282万	↑
11	だるまさんが	かがくいひろし/作	ブロンズ新社	2008	278万	↑
12	三びきのやぎの がらがらどん	ノルウェーの昔話 マーシャ・ブラウン/絵 せたていじ/訳	福音館書店	1965	274万	
13	ボードブック はらぺこあおむし	エリック・カール/作 もりひさし/訳	偕成社	1997	273万	
14	ノントン ぶらんこのせて	キヨノサチコ/作・絵	偕成社	1976	267万	
15	いない いない ばあ あそび	きむらゆういち/作	偕成社	1988	264万	

スタイルの変化を反映したもの、虐待・いじめ・同性愛者が受けた差別を描いたもの、震災や原発事故をテーマにしたものなど)、異分野の作家(人気小説家、漫画家、タレント、歌手・アーティスト、学者など)の登場、アートとしての絵本(美術館が絵本の芸術性に着目し絵本原画展を開催する動き、1990年代から増えた芸術家が手掛ける絵本、絵本から映像化や舞台上演へ広がる事例など)、進化する絵本作家と制作スタイル(SNSがきっかけで書籍化された『いっさいはん』minchi、西野亮廣らクラウドファンディングで制作費を集めファンを増やしていった『えんとつ町のプペル』など)を挙げている。³⁾ 絵本は、これらの質的变化を伴いながら活性化している市場と言える。

1.2 板橋区と絵本

淑徳大学東京キャンパスが所在する東京都板橋区は、絵本とゆかりのある自治体である。板橋区立美術館が、世界最大の児童書専門のブックフェア「ボローニャ・チルドレンズ・ブックフェア」と連携して1981年に「ボローニャ国際絵本原画展」を開催し、日本の巡回展の幹事館になったことをきっかけに板橋区とイタリア・ボローニャ市の交流が始まった。ボローニャ市から寄贈された世界の絵本を収蔵する「いたばしボローニャ子ども絵本館」が2004年に開館し、2005年には板橋区とボローニャ市は友好都市交流協定を締結した。⁴⁾ 2021年3月にリニューアルオープンする板橋区立中央図書館には、1階にボローニャ子ども絵本館が移設され、世界100か国、約3万冊の絵本が並べられる予定である。⁵⁾ 「絵本のまち板橋」として絵本の魅力を伝える特色のある図書館となることが期待されている。



図3. 板橋区立美術館でのボローニャ国際絵本原画展 (左:1981年、右:2019年)⁴⁾

1.3 2017年度～2019年度の取り組み

筆者は、2017年度より授業やゼミ活動で扱うコンテンツのひとつに「絵本」を選び、出版社や子どもの本に関するジャーナリストの協力を仰ぎながら研究を進めてきた。2017年度から2019年度の活動を表2に整理する。2017年度は、PBLとして「赤ちゃん絵本プロジェクト」を立ち上げ、学生の取材記事指導や大学祭での絵本読み聞かせ会を実施した。2018年度は、別案件があったためプロジェクトは実施せず、角野栄子氏が選出された国際アンデルセン賞授賞式とIBBY(国際児童図書評議会)の視察をもとに児童文学における文学賞や国際ネットワークの役割について論文にまとめた。⁶⁾ 2019年度は、再びゼミ内で絵本のプロジェクトを立ち上げ、2019年6月にリニューアルオープンした板橋区立美術館での「イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」の見学を皮切りに、その他の絵本原画展、セミナー、施設見学を行うとともに、フィンランドから来日中のIBBY元国際理事をキャンパスに迎え絵本に関するトークセミナーを開催した。本稿では、2019年度の活動と絵本市場のもつ多面的論考をまとめる。

表2. 絵本に関連した研究活動(2017年度～2019年度)

	2017年度	2018年度	2019年度
研究テーマ	絵本市場の動向と出版社とのプロジェクト学習	絵本を含む児童文学における文学賞と国際的ネットワークの役割	美術館での原画展やメディア展開による絵本市場の広がり
活動主体	ゼミ内のプロジェクト活動(3年ゼミ生14名のうち、3名が主担当)	教員による研究・講義	ゼミ内のプロジェクト活動(3年ゼミ生11名のうち、プロジェクト参加5名)
おもな活動内容	<ul style="list-style-type: none"> 出版社の方を迎えたゼミ授業(5月) テーマ「新しいロングセラー絵本の作り方」 ゼミ内に「赤ちゃん絵本プロジェクト」発足(7月) 新刊絵本のPR方法について企画を考える 出版社のサイトに学生が取材執筆した2本の記事を掲載(11月) (記事タイトル) 「赤ちゃんたちに大人気! オノマトペの秘密を読み解く」 「元幼稚園教諭にインタビュー 親子の絆を絵本で育むために」 大学祭にて、絵本の読み聞かせ・即売会を企画・実施(11月18日・19日) 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの本ジャーナリストを迎えた授業 文芸作品研究Ⅳ(執筆の技法) テーマ「子ども時代の本との出会い」(5月) 学生は伺った話をもとにインタビュー記事を制作 IBBY(国際児童図書評議会)世界大会と国際アンデルセン賞(作家賞:角野栄子氏)の授賞式を視察(ギリシャ:8～9月) JBBY(日本国際児童図書評議会)を取材 いたばしポロニーヤ子ども絵本館(板橋区本町)を視察(2月) 	<ul style="list-style-type: none"> ゼミ内に「絵本プロジェクト」発足(6月) プロジェクト参加学生とリニューアルした板橋区立美術館の「イタリア・ポロニーヤ国際絵本原画展」と関連シンポジウムに参加(8月) 各学生は国内の原画展を視察(夏季休暇中) 「現代ロシアの芸術と絵本—国際アンデルセン賞作家イーゴリ・オレイニコフ氏を迎えて」(国立国会図書館国際子ども図書館)視察(11月) 淑徳大学東京キャンパスにてミニトークイベント 「絵本・児童文学の3つのトピックス:日本&フィンランドの児童文学ジャーナリストをお迎えして」を企画・開催(11月) 東京子ども図書館(中野区:私立図書館)視察(11月) 大学祭にて、絵本プロジェクトの活動報告ポスター発表と絵本展示(11月23日・24日)
研究成果の発表・報告	大学祭のゼミ発表	論文:人文学部研究論集 第4号 「児童文学における文学賞の今日的役割と可能性:国際児童図書評議会(IBBY)と国際アンデルセン賞の視察から」	大学祭のゼミ発表
派生的に広がった活動や研究	<p>プロジェクト活動を通じて、学生が主体的にキャンパス内の各関係者に協力要請を行った</p> <p>〈おもな協力要請〉</p> <ul style="list-style-type: none"> —記事作成において短期大学部 子ども学科の小園江幸子准教授にインタビュー取材 —大学祭のイベント集客(チラシ配布)に際し地域との繋がりが強いボランティアセンターに協力依頼 —大学祭の絵本読み聞かせでは声優志望者の多い松下ゼミの学生も参加 		<p>プロジェクト活動で得た情報をきっかけに、学生が個人研究の中で研究対象を広げた</p> <p>〈派生的な学生の個人研究〉</p> <ul style="list-style-type: none"> —児童向けの絵本から大人向け絵本へ関心を広げ「大人向け絵本の魅力と可能性」というテーマで大学祭で発表 —美術館の美術鑑賞教育法VTS(Visual Thinking Strategies)に触れたことがきっかけで、対話型鑑賞について個人研究で取り組み、4年次には「大学生のコミュニケーションツールとしての対話型鑑賞」というテーマで学会発表を行った

2. 2019年度の活動 ① 企画展・シンポジウム・セミナー等の視察

2.1 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展（板橋区立美術館：2019年6月29日～8月12日）

前述の通り、板橋区立美術館は日本の絵本原画展の火付け役とも言えるボローニャ国際絵本原画展を1981年より毎年開催している。ボローニャ国際絵本原画展はボローニャ・チルドレンズ・ブックフェア主催の児童書のイラストレーション・コンクールに入選した作品を公開する原画展で、新人絵本作家の登竜門としても知られている。2019年の板橋区立美術館での開催は、折しも開館40周年リニューアルオープンを飾る回となり、明るく開放感あふれる館内で展示がなされた。エントランス・ホールから続くプロムナードの先の2階展示室は、ガラス間仕切りを多用した連続性のある空間で、絵本原画の展示のほかにブックフェアの様子を紹介する資料映像コーナーや、絵本を手にとりて読めるコーナーも用意されていた。1階のアトリエコーナーには、絵本や関連グッズを購入できる店舗スペースもあり、間近に原画を見るだけでなく絵本から広がる世界を楽しめる。なお、本展の掲示、ポスター、チラシなどに登場するイラストは2019年ボローニャ展入選者の工藤あゆみ氏によるもので、館内の随所に配されていた。また開期中は、ボローニャ展の関係者や入選経験者を招いた講演会やワークショップなどが開催され、児童から大人まで広い世代が楽しめる企画が用意されていた。絵本プロジェクトの学生とともに下記の講演会の聴講と展示会を視察した(図4)。

講演会「2019ボローニャ・チルドレンズ・ブックフェア総復習」(2020年8月11日)

講師：広松由希子氏(絵本評論家)、松岡希代子氏(板橋区立美術館館長代理)



図4. 絵本プロジェクトの参加学生の視察と講演会の模様(右の写真左:松岡氏、右:広松氏)

講師の広松氏は、世界初の絵本美術館とされる「ちひろ美術館」の学芸部長や2010年のボローニャ展の国際審査員などを務め、松岡氏は長年に渡り板橋区立美術館の学芸員として企画運営とボローニャ国際絵本原画展を率いてきた人物である。絵本業界の詳細を知る両氏による講演は、56回を数える2019年のボローニャ・チルドレンズ・ブックフェアの様態、コンクールの審査の様子、自身が着目した絵本の紹介など多岐に渡った。このブックフェアは、1964年から毎年4月頃に4日間に渡り開催され、児童書に関する商取引の場であるとともに、国際的な文化交流の場となっている点が特徴的である。2019年は80カ国、1442社、約2万8900人の参加があり、その半数は海外からの参加だという。絵本の原画展は3年目からスタートしたもので、当初は空きスペースを活用する目的で始まったものだった。それが今や世界中のイラストレーターが注目する児童書のイラストレーション・コンクールとなり、2019年には62カ国から2901の応募があった。このすべての作品がテーブルに並ぶ様子は圧巻で、国籍の異なる5名が予備審査なしに現地で紙のものを見て審査する。審査員は編集者、イラストレーター、教員等から

多様性とバランスを配慮し選出され、毎年入れ替わる。2019年の入選は、27カ国76人、うち10人が日本人であった。このほかにも、ボローニャ・チルドレンズ・ブックフェアでは出展している出版社よりエントリーされる本の中から優れたものを選ぶ、「ラガッツィ賞」も授与している。フィクション部門、ノンフィクション部門、新人賞などの部門に加え、2019年は赤ちゃん絵本の特別賞も設けられた。本展ではこれらのラガッツィ賞を受賞した絵本も紹介されていた。

2.2 学生による絵本原画展の視察活動

絵本プロジェクトでは、以下の絵本原画展を各学生が見学し、見どころや感想を共有した。

① ブラティスラヴァ世界絵本原画展(うらわ美術館：2019年7月13日～8月28日)

スロバキアの首都ブラティスラヴァで隔年に開催されるブラティスラヴァ世界絵本原画(Biennial of Illustrations Bratislava: BIB)は、ボローニャ国際絵本原画展と並ぶ世界最大規模の絵本原画展として知られる。ボローニャでは未発表のイラストレーションを対象とするのに対し、BIB賞は刊行されている絵本の原画が対象となる。一カ国から最大15名まで応募でき、日本ではJBBY(日本国際児童図書評議会)が絵本研究家、評論家、学芸員などによる国内選考会を行い、応募作を選出している。

【学生による見どころ紹介】エディトリアルデザイナーの村山純子さんの作品『さわるめいろ』など本業が絵本作家ではない人の作品も多く展示され、作り手の多様性が感じとれる。こしだミカさんの『でんきのビリビリ』は原発事故がきっかけで描かれた作品で、こしださんにとって「描くこと＝考えるという行為」だという。絵本の原画からストーリーや社会背景を考えるとといった楽しみ方もできる。

【学生の感想】絵本の作画にもデジタル化の波を感じた一方、日本のノミネート作品はアナログな手法で作られた作品も多かった。世界中から集められた絵本原画を美術作品として捉えて鑑賞し、その背景に思いを巡らせることで間接的に世界の今を知ることができ、新たな絵本の楽しみ方を体験できた。

② 「せなけいこ展」(刈谷市美術館：2019年9月21日～11月10日)

貼り絵を表現技法として見いだした作家せなけいこの代表作『ねないこだれだ』誕生50周年記念として2019年より全国で巡回展が開催されている。絵本原画など約300点が出品され、作家が手作りした貴重なダミー本や、デビューまでに手がけた雑誌・書籍のイラストや紙芝居なども展示された。

【学生による見どころ紹介】駄々をこねたり、泣いたり…、といった、おすました「よい子」ではない生き生きとした子どもたちの姿や、うさぎ・おばけ・妖怪などを題材に生み出された数々の名作絵本の原画が展示されている。子どもや動物の表情、背景の表現など、「貼り絵」独特の質感を味わえる原画の展示のほか、子どもが楽しめる映像作品の公開やパネル展示も行われている。

【学生の感想】全作品が子ども目線で作られていて、大人目線で決めつけた表現をしないことを第一に考えられていると感じた。子供の世界観に寄り添うこととともに、面白おかしいばかりが人生ではないことを幼児に教えることも必要なのではないかと、大人に改めて考えさせる作品だった。

③ 童画の国のパイオニアたち ―日本童画家協会の7人―

(安曇野ちひろ美術館：2019年7月20日～9月30日)

同館は、ちひろ美術館(東京都練馬区)の開館20周年を記念して、いわさきちひろの両親の出身地である長野県北安曇郡に1997年に建てられた。この企画展では、大正から昭和にかけて『子供之友』『赤い鳥』『コドモノクニ』などの芸術性の高い絵雑誌が数多く刊行された時代に「日本童画家協会」を結成した武井武雄、清水良雄、初山滋、村山知義、川上四郎、深沢省三、岡本帰一の7人の原画を展示。当時まだ社会的評価の低かった挿絵を、一芸術ジャンルとしての「童画」として確立すべく展覧会開催や作品集刊行を行って童画界の発展に尽力した活動についても紹介されている。

【学生による見どころ紹介】「童画のパイオニア」と言われるほど、多くの画家や子どもの文化に大きな影響を与えた作家たちの作品が集まる企画展。絵本の歴史を年表のように振り返ることのできる展示があり、子ども向けの絵本の起源や、絵本作家の多様化が理解でき、絵本への興味がさらに深まる。

【学生の感想】第一次世界大戦後、大正デモクラシーが起きた1910年頃から、絵本作家の活躍の場が増えていったことは喜ばしいことだと思う。この7人は、絵雑誌という既存のアイデアから「コドモエブニコ」という単行本を作り、絵本の価値を日本で見出してくれた、ユーモアのある人々だったのでないかと、原画や活動記録を見ていて強く感じた。



図5. 学生がそれぞれに視察を行った絵本原画展（写真は学生による撮影）

これらの視察活動を通じ、絵本原画展にもさまざまなスタイルが存在することを確認できた。多様な文化や表現に接することのできる国際的な絵本原画展、特定の絵本作家にフォーカスし作家のもつ作風や作家性を多面的に理解して楽しむことのできる原画展、絵本文化が花開いた特定の時代に着目し作家の活動や出版文化の歴史をたどることのできる原画展と、三者三様であった。

2.3 絵本に見るアートの100年ーダダからニュー・ペインティングまで

（国立国会図書館国際子ども図書館：2019年10月1日～2020年1月19日）

この展示会は、20世紀における芸術運動を対照し、国内外の絵本をアートの観点で紹介するものであった。絵本の表現にも、出版文化、産業発展、科学技術などの社会変化が色濃く映し出されていることが確認できる展示内容であった。

・ダダとシュルレアリスム

ダダ(ダダイスム)は、第一次世界大戦中に欧米各国に広がった芸術活動で、戦争に対する抵抗や虚無感を背景に、既存の秩序や常識にとらわれない作品が発表された。これは偶然性や無作為の中に美を見い出すシュルレアリスムにつながり、絵本を手がける現代の画家にも影響を見ることができる。

・ロシア・アヴァンギャルド

ロシア革命(1917-1923)の混乱の中で1910年代から1930年代初めにかけて生まれた前衛的な文学・芸術運動。特徴的な色使い、抽象化した幾何学図形やタイポグラフィを組み合わせた作品に特徴がみられ、絵本ではウラジーミル・レーベデフ(1891-1967)の作品などが挙げられる。



図6. 展示会ポスター

・チェコ・アヴァンギャルド

1918年に誕生したチェコスロバキアにヨーロッパのシュルレアリスムが流入し生まれた芸術運動。芸術を高尚なものとする従来の価値観を否定し、日常生活に美的なものを取り込むことを目指した。ヨゼフ・チャペック(1887—1945)、カレル・チャペック(1890—1938)の絵本作品に代表される。

・バウハウスとニュー・バウハウス

バウハウスは1919年にドイツで創設された美術工芸学校で、ナチスの台頭によって14年間で閉校するが、その理念を受け継いで1937年にアメリカにニュー・バウハウスが設立された。美術・工芸・建築などの垣根を越えて総合性を追求したバウハウスの思想は、無駄な装飾を廃し合理性を追求するモダニズムの源流となった。絵本ではジュリエット・ケペシュ(1919—1999)の作品に代表される。

・グラフィックデザインの可能性

子どもの本をデザインするという考え方は1940年頃に登場し、1950年頃からはグラフィック・デザイナーによる絵本制作が行われるようになった。視覚芸術の新しい考え方が絵本にも持ち込まれ、視覚表現でストーリー展開を図ることや、読み手の想像力を引き出す仕掛けが用いられるようになった。

・日本のモダニズム

日本では大正時代に前衛芸術運動が起こり、カンディンスキーらの抽象画に影響を受けた恩地孝四郎(1891—1955)などの版画家が、抽象表現を追求し絵本の挿絵や装丁を手がけた。第一次世界大戦後はヨーロッパへ留学する芸術家が増え、ベルリンに留学した村山知義(1901—1977)はダダやロシア構成主義に刺激を受け、帰国後に新興芸術グループを結成、1927年に日本童画家協会を仲間と創設する。

・第二次世界大戦後の美術の展開

第二次世界大戦が始まるとヨーロッパから米国へ多くの芸術家が亡命し、芸術の中心はパリからニューヨークへと移り、美術表現の多様化と大衆化が進んだ。絵本にもポップ・アーティストのアンディ・ウォーホール(1928—1987)を始めさまざまな芸術家関わった。日本では前衛美術作家の元永定正(1922—2011)、抽象画の早川重章(1924—2019)、イラストレーターの宇野亜喜良(1934—)、現代美術作家の大竹伸朗(1955—)、奈良美智(1959—)などが手がけた絵本が挙げられる。

以上のように、絵本は子ども向けの図書として発展しながらも、同時に各時代の作家が追求した表現技法や芸術思想を取り込んだ大きな文化活動であると言える。

2.4 「現代ロシアの芸術と絵本—国際アンデルセン賞作家イーゴリ・オレイニコフ氏を迎えて」
(国立国会図書館国際子ども図書館：2019年10月6日)

〈講演1〉「現実をおとぎ話にする—想像力の解放区としてのロシア児童文学」

沼野充義(東京大学大学院教授、ロシア・東欧文学研究者)

〈講演2〉「おとぎ話を現実にする」

イーゴリ・オレイニコフ(絵本画家、2018年国際アンデルセン賞画家賞受賞)

〈対談〉「ロシア絵本の世界—オレイニコフ氏の創作に迫る」

講演1では、ロシアにおける児童文学について事例をまじえ概観し、以下の総括がなされた。

- ・ロシアの児童文学では、子ども向けや教育目的だけでなく、独自の美的感覚にもとづくものが1920年代以降に開花した
- ・ソ連下で表現の自由を奪われた作家が児童文学に活躍の場を求め、このことが児童文学の質を支えた
- ・ロシアでは、カモフラージュされた風刺、異化する機能が文学において発達した

続くオレイニコフ氏の講演では、自身のキャリアや創作で重視している点が語られた。大学卒業後、エンジニアを経て30年間アニメーターとしてアニメーション制作に携わり、その後もアニメ雑誌や挿絵の仕事をしていたが、2008年の経済危機でアニメスタジオが閉鎖され挿絵が専門になったという。「アーサー王と円卓の騎士」では、英国に半年間滞在してゆかりの土地をたずね歩き、舞台の6世紀を想像して戦いのシーンは泥だらけで薄暗く、若くして亡くなる数々の騎士を傷だらけに描いた。一般にアーサー王はきらびやかに美化して描かれるが、ステレオタイプな挿絵に対する挑戦でもあったという。

「旧約聖書」では、荒涼とした北方を描写し、文章があることで読者の解釈が広がる挿絵の仕事の面白さを感じたという。動きで伝えるアニメーションとは異なり、重要なものをシンプルに伝える挿絵の世界では、シンプルでありながら豊かな表現が求められる。創作で重視することとして、文章のもっとも重要なところを絵にすること、スーパーマンではなく生身の人間を描くこと、想像力をもって描くことを挙げていた。対談では、自身の挿絵のスタイルが、当初は文章に忠実に描いていたものが、5年ほど前からは文章に問いを投げかけステレオタイプを打ち破るような、「カノン(やり方・ルール)の意)を疑う」スタイルに変化したと語った。このように、絵本画家が想像力を働かせて自分流のストーリーを構築して描かれる絵は、読み手には見慣れない新しい世界を広げる。オレイニコフ氏の作品が子どもだけでなく大人を惹きつけ、描かれる世界のイメージが広がり深い示唆を感じられるのは、その所以だろう。



図7. オレイニコフ氏の作品と国際アンデルセン賞を受賞した角野栄子氏との対談時(2018年)の様

3. 2019年度の活動 ② 施設見学

3.1 板橋区立美術館(板橋区赤塚)およびリニューアル記念シンポジウム

板橋区立美術館は1979年に23区で初の区立美術館として開館した。赤塚城跡地の一面に建ち、隣接する赤塚溜池公園をはさんだ先には板橋区立郷土資料館がある。開設40周年を迎える2019年の6月に約1年間の改修工事を経てリニューアルオープンし、この記念シンポジウム「建物から語る板橋区立美術館」(2019年7月13日)が開催された。シンポジウムでは、今回の大規模改修の方向性を決めるにあたり中心的役割を担った学芸員の動き、初代設計者の村田政真(むらたまさちか)の建築作品と建築思想、その思想を引き継ぎ美術館としての機能性、断熱性、空間の快適性を兼ね備えるために実施された改修内容について解説がなされ、施設を継続的に使用し施設そのものが文化を継承するリビング・ヘリテージとなる美術館のあり方として今回の改修が先駆的な好例であることも示されていた。⁷⁾

また、印象的であったのは同館が開館時からどのような紆余曲折を経て、現在の美術館のスタイルに至ったかという経緯である。開館を5月に控えた1979年1月27日の朝日新聞には「中身はカラッポ・芸術の殿堂」という批判的な記事が掲載されたという。初の区立美術館という話題性の一方で、収蔵作品

が少ないことを当時の評論家たちは「計画の順番が逆」と冷やかな目で見ている。収蔵品、実績とネームバリュー、時間、予算などが無いなかで、若いスタッフが知恵を絞り、3つの展覧会シリーズ—①江戸文化シリーズ ②区内作家シリーズ ③絵本関係—を立ち上げたという。いずれも比較的低予算で実現でき、すき間を狙った企画である。この3つ目の柱の絵本の取り組みが、1981年から毎年開催されるボローニャ国際絵本原画展につながった。当時は絵本の原画展示はまだ珍しいもので、この展示会が板橋区立美術館を特徴づけるシンボルとなり今に至る。



図8. リニューアルオープンした板橋区立美術館の外観およびエントランスから続く開放的な階段

3.2 国立国会図書館国際子ども図書館（台東区上野公園）

同館は、子ども読書年の2000年5月5日にアジア初の国立の子ども図書館として創設された。建物は1906年に建てられた旧帝国図書館の庁舎を改修し、2015年にはアーチ棟が増築された。児童書の保存・閲覧のほか、展示会や子ども向けのイベントも開催している。年齢制限なく誰でも入館でき旧貴賓室を改修した美しい空間で自由に児童書を読める。アーチ棟には、国内外の児童書、関連資料などを開架している児童書研究資料室があり、こちらの入室は研究利用を目的とし18歳以上に限定している。

なお、同館の創設には、1995年設立の「国立の国際子ども図書館設立を推進する全国連絡会（後に国際子ども図書館を考える全国連絡会）」が大きな役割を担った。この会は、子どもの本の書き手（作家・画家）、送り手（図書館・学校図書館・地域文庫）、作り手（出版社）、研究者、国会議員などで組織され、2018年度で活動を終了したが、活動の最後に同館の機能充実に向けて要望書が提出され、その一つは「国立の絵本美術館設立の運動」であった。⁸⁾ 背景には、全国で増える絵本美術館の現状がある。多くは個人運営で存続性や原画散逸の問題があり、永続的な原画の収集・保存が課題となっている。



図9. 国際子ども図書館の正面玄関と内観

3.3 東京子ども図書館(中野区:私立図書館)

日本でも数少ない子どもの本に関する私立の専門図書館である。翻訳家・児童文学研究者の松岡享子氏と児童文学作家の石井桃子氏により1974年に設立された。本の貸出しのほか、「おはなしのじかん」「わらべうたの会」など子ども向けの企画、資料室運営、出版、講演・講座の開催などの活動も行われている。地下一階の資料室には、国内外の児童図書、児童文学の研究書など約19,000冊を備え、英米の児童図書賞の受賞作品(原書)のコレクション、国内外の昔話集、松岡氏・石井氏が薫陶を受けたアイリーン・コルウェル(1904-2002:英国の児童図書館員でストーリーテリングを図書館サービスに導入した先駆者)から寄贈された図書、石井氏の取材記事や論文も所蔵されている。



図10. 東京子ども図書館内の石井桃子の直筆メッセージ(左)、E・コルウェルコレクション(右)

4. 2019年度の研究活動 ③ トークイベントの企画・開催

フィンランド在住の児童図書研究者でIBBY元国際理事のニクラス・ベントソン氏の来日にあわせて絵本・児童文学をテーマにトークイベントを開催した。ジャーナリストで絵本の出版社マイティブック代表の松井紀美子氏とのトークのほか、聖徳大学文学部の村山隆雄教授(国際子ども図書館の館長をはじめ図書館界で国際的な活動に従事)も参加頂き、国内外の絵本を並べ下記のプログラムで進行した。「絵本・児童文学の3つのトピックス:日本&フィンランドの児童文学ジャーナリストをお迎えして」(2019年11月8日 淑徳大学 東京キャンパス 4号館スタジオ)

トピック① 童話の背景にある歴史を知る ~19世紀の英米物語を例に~

『ピーターラビット』『ジャングル・ブック』『ジャックと豆の木』『三匹の子豚』等

トピック② フィンランド生まれの『ムーミン』シリーズと作者トーベ・ヤンソン

トピック③ 児童文学のノーベル賞とも謳われる「国際アンデルセン賞」

まず、トピック①の中で興味深かったのは、『ピーターラビット』の著者ビアトリクス・ポターの持っていたマーケッター視点である。250部の自費出版から始まり、フレデリック・ウィーン社より発行したカラー印刷の本が初版予約で完売し、2年の間で5万部を超えるベストセラーになった後も、どのようにすれば人の手に渡るかを常に考え、多くのキャラクターが登場するシリーズ化、キャラクターのグッズ展開、メディア展開など、現在のコンテンツ産業では一般的であるメディアミックスの戦略が20世紀初頭に実践されていた。続くトピック②では、ニクラス氏が研究してきたテーマである、読者に影響を与える装丁のあり方について、実物の『ムーミン』の穴あき本を見せながら解説がなされた。村山氏からは、このような仕掛け絵本を作るのには高度な印刷製版の技術が必要でエリック・カールの『はらぺこあおむし』の穴あきの本の制作でも日本の印刷会社が採用されたという話題が提供された。

トピック③では、松井氏が2008年から参加しているIBBY世界大会の様子や国際アンデルセン賞について写真とともに紹介された。参加した1～3年生の有志学生は熱心にメモを取り、質疑応答ではニクラス氏に英語で質問をしていた。全体を通し、学生にとっても幼児期から慣れ親しんだ身近な絵本が、さまざまな文化的な側面を持って発展・進化してきたことを再確認できる場となった。



図11. トークイベント当日の様子

5. 2019年度の研究活動 ④学生の成果発表と派生的な研究

5.1 大学祭でのプロジェクト発表(11月23日・24日)

絵本プロジェクトの一連の活動報告として、大学祭のゼミ発表の一幕で絵本プロジェクトのポスター展示と絵本の展示を行った(図12)。ポスター発表では、来場者を楽しんで見て頂けるようクイズを用意し、原画展のチケットやパンフレットの实物も貼付するなどの工夫がされていた。テーブルには、研究で取り扱った絵本を並べ、直接手にとって絵本を開いて見てもらえるようにした。



図12. 大学祭でのポスター展示と絵本の展示

5.2 絵本プロジェクトから派生的に広がった学生の個人研究

3年ゼミ生は、グループで取り組むプロジェクトと並行して、各自の個人研究を進め、大学祭で掲示発表している。絵本プロジェクトに参加した学生の中には、活動で得た情報から派生して特定の領域について個人研究でさらに掘り下げる、以下の動きも見られた。このように派生的な研究が広がっていくことも、絵本が持つ多面性を示していると考えられる。

—児童向けの絵から大人向け絵本へ関心を広げ「大人向け絵本の魅力と可能性」について研究
—美術館の美術鑑賞教育法VTS(Visual Thinking Strategies)に触れたことがきっかけで対話型鑑賞について掘り下げ、各種ワークショップに参加したうえで自分でもファシリテーションを実施

6. 絵本をめぐる多面的考察

6.1 視座① 絵本市場の特異性

2019年度の研究活動で再確認できたことは、出版界で絵本市場が持つ以下のような特異性である。

- ・ロングセラーに支えられてきた市場で、数十年に渡るミリオンセラーが存在する
- ・作家、出版社、書店流通以外にも、翻訳者、製本印刷などのステークホルダーが存在し、教育行政や図書館政策の影響も大きい市場である
- ・早くから国際的ネットワークと国際市場が形成されてきたグローバル・コンテンツである
- ・画家やイラストレーターの育成・発掘につながるインキュベートの機能を有する
- ・他領域でのクリエイターが、政治的・経済的影響を受けて絵本市場に活路を見いだす場合がある
- ・絵本には、社会的背景や芸術家の志向性が映し出され、異文化理解を促す場合がある
- ・ベストセラーには明確なキャラクター性や世界観が見られ、根強いファンが形成されることによりメディアミックスとの親和性が高い(本項目については、マンガやアニメに通ずる)

6.2 視座② 世代横断型のコンテンツ

絵本には、子ども自身が本を選ぶ行為だけでなく、親・保育者・周囲の大人による選書や読み聞かせを伴う場合が多い。そのため、上の世代の影響が継承されやすい一方、世代を横断して共有することのできるコンテンツともなりやすい。ヨシタケシンスケの作品に代表される近年の絵本のヒット作品にも、その特徴が反映されている。しかも、同じ視覚表現でも映像メディアとは異なり、自分のペースで物語を楽しめる絵本は、各世代に自由な読み方を提供する。紙の書籍・雑誌の販売が低迷する中でも、絵本の持つこのメディア特性によって、紙の絵本は世代横断型の底堅いコンテンツとして期待される。

6.3 視座③ 有力コンテンツとしての原画展と拡張性

視察で確認できたのは、絵本原画が芸術・美術作品として鑑賞される対象となり、美術館や地域施設の来場につながる有力なコンテンツに成長していることである。一方、出版の現場では長らく、原画はあくまで印刷前の素材として扱われ、保存や管理の課題も浮上している。このような環境整備に課題を残しつつも、原画展そのものに大きな市場性を見いだした企業が、マンガやアニメの原画展を開催する動きが見られる。「井上雄彦 最後のマンガ展」(上野の森美術館ほか、2008～10年)、「ONEPIECE展」(2012年～、森アーツギャラリーほか)の成功を機に、2010年代はマンガの原画展が増加した。このような原画展は作品背景やプロセスを垣間見る楽しさを提供し、展示会形式の進化によって原画展自体が有力な体験メディアに発展していく可能性も高い。

その一例として、群馬県の前橋文学館で開催された「月に吠えらんねえ展」を挙げる。同館は近代詩の詩人萩原朔太郎をはじめ前橋ゆかりの詩人の資料を所蔵し、本館近くに萩原朔太郎の生家の一部や書斎を復元した萩原朔太郎記念館がある。一方、『月に吠えらんねえ』(清家雪子、講談社)は、萩原朔太郎の詩集『月に吠える』(1917)から着想したマンガで、第20回(2017年)文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞を受賞した。舞台は、詩人らが住む架空の街「□(シカク:詞歌句)街」で、萩原朔太郎、

北原白秋、三好達治、室生犀星、与謝野晶子、斎藤茂吉らの作品イメージから作られたキャラクターが登場し、詩も引用される。「月に吠えらんねえ展」では、複製原画や書き下ろしマンガが展示され、個人的かつ非商業的な利用目的に限り撮影も可とされ、AR技術を用いたアプリでキャラクターとの合成写真が撮れる(図13)。寄せ書きには、日本語以外の言語も散見された。このように、多くのファンが聖地巡礼としてわざわざ訪れるコンテンツ・ルーリズムの有力コンテンツとして、原画展と組み合わせた立体展示や体験ゾーンは今後も増えていくだろう。



図13. マンガの原画展示企画展の例(前橋文学館「月に吠えらんねえ展」2019年7月8日～10月9日)
 ※左写真はホームページ⁹⁾より

7. まとめと今後の展望

約3年に渡って進めてきた絵本に関する研究活動では、絵本のもつ多面性によって、他の表現領域へ応用できる視座、コンテンツ産業、美術館、図書館、行政などのさまざまなステークホルダーから俯瞰した視座を得ることができた。これらの多面的な視座は、今後の自身の研究の土台になると感じ、あらためて表現にたずさわる学問分野の広がり認識できた点も有意義であった。今後は、これらの研究を実学として結実できるように、現代的意味や可能性の示唆を目指してさらに深めていきたい。

謝辞

本研究のトークイベントに登壇頂いたIBBY元国際理事のニクラス・ベントソン氏、マイティ ブック代表の松井紀美子氏、聖徳大学 村山隆雄教授に深く感謝いたします。

14

引用文献

- 1) 「特集 児童書マーケットを検証する」『出版月報』2019年9月号, 出版科学研究所, pp.4-13
- 2) 「名作絵本が勢ぞろい! ミリオンセラー絵本ランキング2020」『MOE』2020年7・8月合併号, 白泉社, 2020, pp.6-11
- 3) 畑中梨沙「拡張する絵本の世界(前編)」KDDI総合研究所 調査レポート R&A 2020年2月号 <https://rp.kddi-research.jp/article/RA2020003> (2020年9月20日アクセス)
- 4) 「ボローニャ市と絵本のまち板橋」板橋区ホームページ(区政情報, ボローニャ市と絵本のまち板橋) <https://www.city.itabashi.tokyo.jp/kusei/1025922/1026085/index.html> (2020年9月20日アクセス)

- 5) 「2021年3月中央図書館がオープン」板橋区ホームページ(区政情報, 絵本のまち板橋) <https://www.city.itabashi.tokyo.jp/kusei/1025922/1026084/index.html> (2020年9月20日アクセス)
- 6) 杉原麻美「児童文学における文学賞の今日的役割と可能性: 国際児童図書評議会 (IBBY) と国際アンデルセン賞の視察から」『淑徳大学人文学部研究論集 第4号』淑徳大学人文学部, 2019, pp.83-95
- 7) 『板橋区立美術館と村田政真』板橋区立美術館 編集・発行, 2019
- 8) 坂内夏子「絵本美術館の設立: 絵本と美術の関係」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』早稲田大学大学院教育学研究科, 2020, pp.29-40
- 9) 前橋文学館 ホームページ <https://www.maebashibungakukan.jp/> (2020年9月20日アクセス)